

主がお入り用なのです

(ルカ19・28～40)

一、先に立って進まれる主

28節で重要なのは、途中からです。
「イエスはさらに進んで、エルサレムへと上って行かれた。」という文言です。
「イエスはさらに進んで」と訳しているのは、新改訳初版から新改訳2017まで、それに個人訳のいくつかです(前田訳、塚本訳)。文語訳は「先だち進みて」、口語訳は「先頭に立ち」、新共同訳と聖書協会共同訳は「先に立って進む」、フランシスコ会訳は「先頭に立って」です。どちらにも訳せることばですが、私は、主イエスが置かれていた状況に鑑みて、口語訳や新共同訳その他の訳のように「先頭に立って進んで行かれた」と読むのが好きです。

主イエスが、ご自分に託された使命を憶いつつ、ご自身が先頭に立ち、弟子たちが主イエスに従っているという構図です。これが合つと思つからず。おそらく人間は、自分の死期を悟り、その時が近づいていると知ると、周囲の喧噪が聞こえなくなり、ひたすら自らに授けられた使命に集中するようになるのではないのでしょうか。それは、人生の中で最も充実した時であり、美しい時であると言えます。

二、主がお入り用なのです

30節、31節をご覧ください。
「向うの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばが、つながれているのに気がつくでしょう。それをほどこいて、連れて来なさい。もし『どうして、ほどこのか?』とだれかが尋ねたら、『主がお入り用なのです』と云いなさい。」と、主イエスは言われました。主は、ただ一つの事を見つめて語られていきます。それはエルサレムに入り、父から授けられた使命である、苦しみを受け、殺され、よみがえらされることです。そのことに集中しておられました。ゆえにここで、千里眼のような神性を現しておられます。ですが、これを神性と言ってしまったら語弊があるかも知れません。人間でも、この手の超能力を発揮する方がいるからです。主イエスの神性とは、やはり、イエスを見れば創造主なる神が見えて来るところに主眼点を置く必要があります。

さて、主イエスが命じられたのは、時代と文化を超えて不可思議に思われることばでした。勝手に、人の持ち物である子ろばを「主がお入り用なのです」との理由で借りて行くことだったからです。当時も今も、ほとんどの方が同じように思うことではありません。

32節、33節をご覧ください。
「使いに言われた二人が行って見ると、イエスが言われたとおりであった。彼らが

子ろばをほどこいていると、持ち主たちが、『どうして、子ろばをほどこのか?』と彼らに言った。」とあります。これが、常識的な反応です。

弟子たちは、主がおっしゃったとおりのことを言いました。34節です。
「弟子たちは、『主がお入り用なのです』と言った。」と。ところで「主がお入り用なのです」ということばですが、31節も、34節も、元の聖書には「その主がお入り用なのです」と書かれています。「それ」とは何でしょうか。「子ろば」です。たかが一頭の子ろば、たかが一頭の家畜と思われるかもしれませんが、子ろばの主は神であり、主イエス・キリストです。ここで子ろばを、私共に置き換えてみたいと思います。私共の一人ひとりとは、何のために生まれたのでしょうか。私は次のように申し上げます。
「私の主、また主人は神である」と知り、神と私共を隔てている罪の問題が解決され、罪から解放され、自分に授けられた使命を知って、自らの意思で生きることである」と。「そんな画一化された人生はいやです。縛られているようでいやです。私は自由に生きたいです」と思われるなら、それもけっこうです。どのような人生を欲するか、どのような価値観を持つか、それは各人が決めることです。ですが、何のために生きているのか分からない人生、自分が生まれた理由が分からない人生、自分の

使命が分からない人生は、浮き草のようになると思われます。

三、恐れぬ、迷わぬ

神は私共を、自らの意思で決定する者として造られました。最初に造られた人であり、人類の代表であるアダムを見られてください。神は人間を、神に背いて生きることが出来るほどの自由を与えられました。こうしてアダムは、自分が神のようになり、すべてを決裁できる道を選びました。すなわち罪の道です。創造主の前に、的外れな道、曲がった道、反逆の道です。だからと言って、アダムを見捨てられたわけではありません。これが、主イエス・キリストによって明らかにされた神、すなわち啓示された神です。したがって、もし道を誤つたと気づいたら、方向転換しないしは方向の修正をしてください。神さまは祝福してください。私たちがとつての模範は、神が人となられた主イエス・キリストです。主イエスは、ご自身に授けられた使命を思い、先立って進み、平和の王として子ろばに乗ってエルサレムに向かわれました。

私共は、主であり、師であるキリストのあとに続く者として、気負うことなく、恐れぬことなく、迷うことなく、歩む者でありたいです。御霊なる神は、きっとそのように導かれることではありません。